

『新しい学校』一九五三年五月（興文館）

■教育時評

民主社会の

政治教育



中共から帰った子供たちが、非常にはつきりした態度でものを言うことが話題になっている。私は直接会って聞いたわけではなく、ラジオや新聞などで聞き知っている程度だから、詳しいことはわからないが、彼等に対してなされた教育の一面がよく出ているようである。その中でとくに考えさせられたのは、政治教育のあり方ということである。

尊敬する人物は？ と聞かれて、スターリン、毛沢東、徳田球一と即座に答える彼等の断乎たる？ 返事は、教育のあり方について様々なことを考えさせるのである。日本の現在の子供に聞いたなら、内容はともかくこういう態度は殆んど期待出来まい。その尊敬する

人物が誰にしる即座には出ないだろうし、或はそういうことをこれ迄考えもしなかったから、聞かれてどぎまぎする位がおちであるう。といってそういうことは考えたことがなかったということ、はつきり解答出来る子供もまた始んどないであろう。目上の人からそういうことを聞かれたとき大抵はだまって、うつむくか、ニヤニヤする位だろうと思われるのである。

子供にはつきりした内容を答えさせるということは、それだけならそう大したむつきしさはない。現に戦争中の日本の教育にもそういう点があった。尊敬する人物は東条首相とヒトラーと、おうむ返しに答えさせることもあったのである。こういったからと言って、何も私は中共の教育の仕方が戦時中の日本のやり方と同じだなどという大それた推断を下しているのではない。中共の教育はそんな独裁者のな、独断的な、また教育方式から言えば押しつけ的な教育方式とは全く異った新民主主義に則った教育だろうと思うのである。

がそれよりも私の関心は、現在の日本の大人は、そういう場合にどんな内容の答をすることを子供に期待し、希望しているのだろうか、またその時子供にどんな態度をとってもらいたいと願っているのか、一体そういうことが具体的に考えられたことがあるのだろうか、とくに毎日行われている教育はそういう問題をどう処理しているのだろうか、ということである。

尊敬する人物はと聞かれて、二人の名前をあげるだけなら、オウムでも出来るのであつて、そういうことを中共はしているわけではないだろうが、我が日本の民主主義の教育はどう考えるのだろうか。勿論オウムをつくるうとしていないことは確信していると思うが、民主主義では他ならぬ人間の自立的な判断が最も尊重されねばならぬ筈であるから、そういうとき確乎たる返答を期待するのであろう。それでは、スターリンや毛沢東にかわつて、アイゼンハワーや吉田首相と答えることを期待するのであろうか、或は民主主義の社会では現存する人物でなく、歴史上の人物ワシントンやリンカーンを答として出すのであろうか。

いやそうではあるまい。民主主義の社会ではそういうように、答が一色にぬりつぶされることが、そもそも考えられないのであろう。それぞれ自由に自己の判断で、様々

な人物が自分の尊敬する人物として答えられてよい筈である。とすれば答の内容はまずどうでもよい（極端だが）のであって、それには大して気にとめる必要がないということになりそうである。

ことは、最大の急務の一つではなかるうか。それは日本の民主主義を維持する基礎的な仕事の一つであるう

（矢口新）

けれども人に開かれて、ニヤニヤ、ムニヤムニヤはいくら民主主義の社会でも困るであらう。否それこそいけないことで、それは総選挙をしばしば遂行する意味がなくなるのであらう。やはり自分自身の判断をはっきりした態度で表現してもらいたいのである。尊敬する人物という問題について言えば、若しそんなことを考えたことがなければ、そのように、現在そういう人物はいなければ、そのようにはっきり答えてもらいたいということであらう。こうなつて来ると、民主主義社会の政治教育ということは、一筋縄では行かぬ難物だということになる。或る文化内容を与えるということだけでなく、それを通じて人間の態度を形成するという、最も基本的な教育理想につながるのが、民主主義社会の政治教育だということになる。そういうものが如何にして成立するかというその方法論に至っては、まだ考えられてもいないようである。新しい政治教育の方式を追究する